

日本ラテンアメリカ学会 会 報

№ 47

1993年11月30日

目 次

1. 学会活動の近況
2. 第15回定期大会
3. 理事会報告
4. 研究部会報告
5. 近著紹介
6. 学術・文化情報
7. 近着会員業績
8. 事務局から

1. 学会活動の近況

ロゴのデザイン作成を依頼 規約の検討作業も進展

第14回定期大会で山田理事長が提案し了承された学会のロゴ作成に当って、理事会ではこのほど筑波大学芸術学系の外国人教師 Rodney Milius 氏に原案の作成を依頼した。原案作成にあたっては既報(46号)のとおり会員より基本コンセプト等のアイデアを募集したが、残念ながら1件も提案が寄せられなかった。

原案作成を依頼した Milius 氏は、カンタス航空の尾翼デザインやブルームスデイ書店のロゴなどを作成したことのある英国の新進デザイナーで、ヨーロッパで数回受賞している。

学会の依頼に対し同氏は、アメリカ大陸の先住民のモチーフや日本の紋章デザインなどを研究しており、数種の原案を作成する予定。その提案をもとに次回の理事会で検討することになっており、本会報の次号にも学会のシンボル・マークがお目見えすることが期待されている。

またもうひとつの懸案事項である役員選出規則を中心とする現行規約の改正検討作業に

ついては、理事(中川委員長、加茂、二村各理事)と運営委員(東日本・乗、西日本・小泉、中部・田中の3会員)からなる規約等検討小委員会が、9月25日午後上智大学で全体会議を開き、理事会に対する答申原案を検討した。次回理事会で中川委員長から正式に答申が行われる予定である。詳細は不明だが、理事選出の地域的偏りの是正に重点がおかれている模様である。

理事会での慎重な審議を経て、次期大会総会で理事会から会則および役員選出規則の改正案が提案されることになるとみられる。

2. 第15回定期大会

来年6月愛知県立大学を会場に 大会テーマ、発表者を募集

第15回定期大会は既報(46号)のとおり、来年6月愛知県立大学を会場に行われることが最終決定した。大会準備委員会(委員長稲村同大学教授)では10月に会合を開き、プログラム原案を検討した。開催日については現在同大学の学事日程と調整中だが、第1ないしは第2土・日曜日が有力である。

定期大会が中部地域で開催されるのは、^{50回大会も}1991年に南山大学で開かれた第12回大会に続いて³度目。今回は愛知県立大学の稲村、小池(康)、田中(敬)会員のほか、名古屋大学の二村、南山の安原会員が加わって準備委員会を結成、精力的に準備を始めている。委員会では大会を盛り上げるためにも広く会員から、統一テーマ、シンポジウム、各研究発表パネル(分科会)の提案をつのっている。

提案や発表を希望される方は、〒467 名古屋瑞穂区高田町3-28 愛知県立大学外国語学部 小池康弘まで、手紙ないしはFAX(052-851-3255)にて連絡を望んでいる。締切りは94年1月10日。

3. 理事会報告

○第63回理事会

日 時：1993年9月25日(土)

場 所：上智大学

出席者：山田、加茂、アンドラーデ、石井、
中川(和)、堀坂、二村、三田(書記)
(委任：大貫 欠席：高橋)

1. 各委員会の報告および審議

1) 東日本および中部日本研究部会を10月30日に、西日本研究部会を11月13日に開催することに決めた。

2) 年報第14号には、論文6点と書評5点を掲載予定であることが報告された。また年報編集運営委員を浜口伸明会員に委嘱することにした。

3) 会報の「書評」欄は年報との混乱をさけるために今後、「近著紹介」とすることになった。年報に掲載された論文のコメント、あるいは書評に対する反論等も会報に掲載することとなった。

4) 1994年開催予定のL A S Aアトランタ大会への協力について検討された。

2. 役員選出方法検討について

規約等検討小委員会で検討された問題点について中川(和)担当理事より報告があり、理事および監事の選出方法、関連規約等の見直しの必要性等が報告された。1994年の総会で中間報告を行えるように作業を進めることになった。

3. 学会のロゴに関し会員から提案(会報46号で募集)は特になく、デザイナーに依頼することになった。

4. 定期大会について

非会員の大会参加については、各大会委員会で検討することとした。但し、非会員の参加を認める場合には紹介者の明記と参加費の徴集等を条件とすることとした。

5. 新入会員5名、退会者2名が承認された。

4. 研究部会報告

○中部日本部会

1993年秋季の中部日本部会は、10月30日午後2時から愛知県立大学7号館で開催された。

当日は朝から時折激しく雨の降るあいにくの天候だったにもかかわらず、中部日本部会としては過去最高の26人が参加して盛況裡に行われ、5時20分に閉会した。各報告の要旨は以下のとおりである。

○第1報告：プエルトリコ政治の現況 — 1992年総選挙の結果と1993年 住民投票の展望—

志柿光浩(常葉学園大学)

歴史上、古典的な意味での植民地帝国になることを避けてきた米国にとって、プエルトリコ問題は最大の植民地問題である。

そのプエルトリコでは、1992年11月の総選挙において、州権獲得を目指す新進歩党(PNP)が勝利を収め、同党の公約どおり本年11月に、州権か、現在の自由連合州制の拡充か、独立かの3つの選択肢についての住民投票が実施されることになった。

プエルトリコの政治的地位について最終的な決定権を持つ米国連邦議会に対してこの住民投票は何の法的拘束力も持たないが、「住民の自決権の尊重」を建前としてきた米国としてはその結果を無視することはできないし、問題の先送りはできない状況が生み出されつつある。しかし、財政問題やヒスパニック系国民の増大の問題などとも関連するこの問題の解決は決して容易ではない。

○第2報告：現代の『メキシコ人』を 考える—J. リードからP. オスター へ—

野田 隆(愛知県立大学)

1980年代末期の「危機」のさなかのメキシコ人20人の生活取材したルポルタージュ、パトリック・オスター著『メキシコ人』(野田他訳 晶文社 1992年)の簡単な紹介を行ない、20世紀メキシコ史に関する二、三の感想じみたコメントをのべた。著者はオスカー・ルイスの名著『サンチェスの子供達』(みすず書房 1969年)に範をとり、貧困と腐敗と抑圧の現実の具体的な叙述に徹しようと務めてはいるが、現体制の偽善と矛盾した政策にも、歯に衣させぬ批判を加えている。本書は

アメリカン・デモクラシー礼讃が鼻につくものの、メキシコにおける真の民主主義（とりわけ言論の自由と公正さ）の欠如、民族主義の非合理性の具体的指摘は、分析的ではないがそれなりの説得力を持っている。国家権力の社会生活への積極的介入が「従属」からの脱却、さらには「発展」と「公正」をもたらす、と主張してきた「革命神話」の終焉はあきらかであるが、はたしてNAFTA（北米自由貿易協定）は万能薬となり得るのであろうか。

第1報告はラテンアメリカと米国の狭間にあるプエルトリコという、どちら側の研究者からも比較の見逃されがちな地域の現状報告ということで、事実関係の質問が多数寄せられた。第2報告ではメキシコ人、アメリカ人とNAFTAとの文化的、社会的側面での関わりなどが関心を呼び、文明論的な議論が展開された。なお第2報告を担当した野田氏は非会員であるが、われわれの依頼を快く引き受けてくださった。記して感謝したい。

（文責：二村）

○東日本部会

東日本部会は10月30日に上智大学で15名の参加者を得て開かれ、新木秀和氏（筑波大学大学院）の「エクアドルにおけるベラスキスモの形成と展開—研究史の再検討から」、横山功氏（上智大学大学院）の「エヒード改革の政治過程—サリーナス政権下の『国家・農民』関係—」、子安昭子氏（上智大学大学院）の「ブラジルの知的所有権法と新たな米伯貿易摩擦」の3つの報告が行われた。エクアドルのベラスキスモやブラジルの知的所有権法など、これまで日本ではあまり取りあげられなかった分野で若い研究者による取り組みがなされていることは、今後のラテンアメリカ研究の広がりの可能性を示すものであった。

ベラスキスモに関する報告では、「個人主義的ポプリスモ論」の検討が行われたが、新木氏自身も指摘するように、議論のなかではからずもポプリスモの定義はさまざまであり、この問題について言及する際には注意が必要

であることがあらためて認識された。ベラスキスモとポプリスモの関係については、むしろ、逆に、前者の研究を通じて後者に関する議論を深めていくことができるのではないか。また、これは部会の報告とは直接関係はないが、今日における脱ポプリスモ、ネオリベラリスモとの関係でポプリスモについて再検討する必要があるように思われる。

エヒード改革に関しては、これまで主としてその社会経済的影響に関心がむけられてきたが、横山氏の報告では政府レベル、農民組織レベルにおける政策決定過程が体系的に整理され、興味深いものであった。エヒード改革を含むサリーナス政権の諸政策をめぐっては学会関係者の間でも多くの研究が行われており、多角的な立場から意見の交換ができる数少ないテーマのひとつである。多数の参加者を得て議論したい問題であった。

ブラジルの知的所有権問題については薬品について論じられた。一見、マイナーな問題に見えるが、しかし、これはブラジルの経済発展構造や対米関係、さらに米州自由貿易圏構想ともかかわる大きな問題を含んでおり、今後、さまざまな品目について米国とブラジルの貿易摩擦について解明していく必要がある。

今回の研究部会では、米州貿易圏問題との関連において、米国によるラテンアメリカの経済統合について、ラテンアメリカ諸国側の経済発展構造からも細かく検討する必要性が指摘され、来年度の大会に向けてこの方向で準備を始めることが決定された。

（文責：後藤）

訃 報

会員の柴田真知子さんが9月にご病気でお亡くなりになりました。ご生前のご研究を悼み、心よりご冥福をお祈りいたします。

なお、ご主人より退会の連絡とともに「お世話賜りました皆様には厚く御礼申し上げます」との一筆がありました。（理事会）

5. 近著紹介 三田千代子・奥山恭子編『ラテンアメリカ家族と社会』新評論、1992年、298ページ。

紹介者：齋藤文子（東京大学）

ラテンアメリカの家族の絆は強固である。しかもその家族の範囲は、単なる世帯、あるいは親類縁者の集まりを越えた広いネットワークを形成することがある。ラテンアメリカ社会のあらゆる側面で、この家族の果たす機能、その重要性を軽視することはできない。こうした認識のもとに、12人のラテンアメリカ研究者がそれぞれ得意とする地域における家族を多様な角度から捉えて紹介したのが、『ラテンアメリカ社会と女性』（1985）、『ラテンアメリカ都市と社会』（1991）に続いて編まれた本書である。

全14章の各章の終りには引用文献ではなく、読者のための解説入り参考文献が挙げられているが、本書が専門書ではなく、紹介を目的としているという意図に即したものであろう。前半では地域別の家族史を扱い、メキシコ、ニカラグア、ペルー、ブラジル、アルゼンチンのそれぞれの国における家族の変遷を現代の核家族化にいたるまで概観している。「征服」後の植民地体制下におけるイベリア半島の家族制度の導入と展開、および近代化の時代における家族像の記述には、各国とも共通するところが多い。

国本伊代は1章「メキシコの家族史」のなかで、メキシコ植民地時代の家族とは「植民地統治機構の重要な末端組織でもあり、スペイン国王にとって家族は植民地社会の安定と繁栄の基礎であった。従って家父長的家族制度が法律によって規定され、かつ保護されていた」と述べているが、これは一般にラテンアメリカ植民地時代の白人社会全体に当てはまるもので、家長が絶対的な権力を握って家族を支配する家父長制が、統治上もっとも都合のよい制度として推進されていたのである。奥山恭子が記しているように「ラテンアメリカの家族の歴史は、極言すれば、家父長制の生成、変遷の歴史といってもよい」（終章）のであり、本書前半の各国の家族史は、いわばこの命題の展開といえるものである。

とはいえ、都市と農村の格差や階級格差、またアルゼンチンのような移民受け入れ国では出身国別の相違なども大きく、ラテンアメリカにおいては、一国のなかに実に多様な家族形態が同時に存在する。本書では、「まえ

がき」で断わっているように、主に国家社会のなかの家族を取り上げ、インディオ社会の家族制度には焦点を当てていないが、それでもそれぞれの報告者は限られた紙数のなかで、いかに歴史的に、また同時代的に異なる家族像を提示するかということに大いに苦心しているように思える。

そのなかで松久玲子による2章「ニカラグアの家族」は、サンディニスタ政権が、男性の家庭放棄、男性不在家庭、マチスモの誇示といった悪弊を克服し、同時に長期化する内戦による労働力不足に対応するために、働く女性を支援する政策を推進し、新しい家族像を提示したことを具体的に報告しているのが、紹介者には興味深かった。

テーマ別に構成された後半では、法制度や心理学的立場からみた家族、教会と家族の関わり、ブラジルの家族企業の分析、文学のなかのインディオ家族像、コロンビアの若年労働者の問題が各章で取り上げられている。

三田千代子による序章「ラテンアメリカの家族史の姿」は各国の家族史を要領よく総括しており、また奥山による「現代ラテンアメリカの社会と家族」は、ラテンアメリカの親族網の拡大に重要な役割を果たしている代父母制や、人権迫害による家族崩壊にも触れており、目配りの利いた終章になっている。

家族研究は最近関心を集めるようになってきたが、ここに示された以外にも、ラテンアメリカの家族についてはさまざまなアプローチが可能であろう。たとえば紹介者の専門である文学でいえば、ガルシア・マルケスの『百年の孤独』、カルロス・フエンテスの『アルテミオ・クルスの死』、イサベル・アジェンデの『精霊たちの家』などの小説は、三世代にわたる一家族の歴史を扱い、家族像の変遷、家父長制の問題、あるいは社会における家族の役割といった、本書で提起されているいくつかのテーマが内包されており、こうした小説の分析もラテンアメリカにおける家族の意味を探るには大いに有効であろうと思われる。

奥山が終章の結びに述べているように、「本書が今後のラテンアメリカ家族研究の叩き台とならんことを」願いたい。

近著紹介 中牧弘允編『陶酔する文化 — 中南米の宗教と社会』平凡社、1992年、301ページ。

紹介者：三田千代子（上智大学）

本書は、中南米地域（本書によれば、ラテンが目立つけれども、ゲルマンもアフロもアラブも日本も含むという意味で、あえて「ラテンアメリカ」ではなく「中南米」を用いたとしている）の宗教と祭りを特徴づける「トランス」「カーニヴァル」「シンクレチズム」をそれぞれの主題として各宗教と祭りを、人類学、宗教社会学の研究者が現地調査に基づいて論じたものである。

本書の構成は、論文が収録された第1部と報告討論の第2部とから成っている。第1部には6編の論文が収録されている。この内4編はブラジルの宗教と祭り（幻覚剤を使用するサントダイミ教やユニオン・ド・ヴェージェタル、憑衣宗教のバトゥーケ、ブラジル成長の家教会、レシッフェのマラカツ）を事例として「トランス」「シンクレチズム」「カーニヴァル」を論じている。残り2編でもペルー（17世紀の「偶像崇拜」根絶運動）とカリブ海地域（例えばキューバでのカーニヴァルの世俗化）の宗教と祭りを事例にして「シンクレチズム」と「カーニヴァル」が論じられている。第2部ではこれら論文のテーマの基本的概念や関連の現象に加えて「カトリシズム」についても報告討論が展開されており、前半の6論文の基本的テーマの理解を深めるのに役立っている。

本書が編まれた動機は、近代以降人類が忘れてきたもうひとつの文化を中南米の宗教と祭りの中から提示しようとするものである。つまり、人間の営為＝文化には「さめた文化」と「陶酔する文化」という二側面があるとし、近代以降、工業化の進展とともに合理的な「さめた文化」が、人間文化の中心に据えられ、「陶酔する文化」は周辺においやられてきているとするのが、本書の編者の文化および現代社会の捉え方である。例えば、幻覚宗教の論文で、「幻覚」を体験する当人にとっては「現実」そのものであり、その「現実」もひとつの真実であり、人間にとって正常な反応であると論じられているように、「幻覚」は従来言われてきたように幻覚ではなく、人間の現実の営みのひとつとして解釈できるこ

とを示している。

「憑衣」も決して特別な人間にのみ起こることではなく、すべての人間に共通したことであり、むしろそれは、個々の人格の豊かな表現として解釈される。このように、現代社会ではマージナルなものとなった人間文化の一方を中南米の文化の中に発見しようとしている。つまり本書は、「陶酔する文化」という合理的ではない人間の営為の一つの側面を観察し、「さめた目」で読者にそれを言語によって伝えようとする大変野心的な論文集でもある。

ラテンアメリカ地域に関心を持つ者にとって、興味深いのはここで指摘された中南米の宗教の特徴である「トランス」と「カーニヴァル」のいずれも、もうひとつの特徴である「シンクレチズム」と重なりあっているということである。例えば、「トランス」のひとつとして論じられている憑衣宗教のバトゥーケは、同時に黒人文化の影響を受けておりシンクレチズムの側面も持っていることが示唆されているが、本書で扱われた他の5つの宗教と祭りもシンクレチズム化が指摘されている。つまり当然とはいえ、500年に及ぶラテンアメリカの住民の混血化は、宗教の「混血化」でもあったということに思いあたる。公式的にはカトリック教徒が優勢であるとされる地域ではあるが、この地の住民の間にはインディオの伝統的な信仰やアフリカ黒人の信仰、ヨーロッパからもたらされたカーニヴァル、移民の持ち込んだ宗教がラテンアメリカのそれぞれの社会と文化の中で固有の展開をしてきた。このようにラテンアメリカの世界を捉えてくると、本書も指摘しているようにシンクレチズムは新世界に創造的な活動をもたらしたものといえよう。

以上、ラテンアメリカの文化に関心を持つ者の読後感である。「陶酔する文化」の存在を感知しつつも、「さめた文化」にどっぷり浸って、ラテンアメリカの人々の営為を考察してきた者にとって、本書はこうした研究態度の限界をしらせてくれたと同時に今後の活動へのエールのようにも思える。

6. 学術・文化情報

○ラテンアメリカ社会学会第19回大会

ラテンアメリカ社会学会 (ALAS) の第19回大会が、5月30日から6月4日ベネズエラの首都カラカスにおいて開催された。キューバを含むラテンアメリカ各国から、社会学を中心に社会科学分野の研究者、学生など700人以上が会し、全体会議と15の個別テーマごとの分科会が連日行われ、ディスカッション・セッション総数が150を超える大規模な会議となった。

昨年ラテンアメリカでは、開催地ベネズエラにおける2度の軍事クーデター未遂事件をはじめ、ペルーのフジモリ大統領による自主クーデター、ブラジルのコロール大統領退陣劇と、80年代に進展していた域内の民主化の行方が危ぶまれる事件が続いた。今大会ではこれを受けてか、テーマとして「ラテンアメリカにおける社会政策、経済発展、民主主義の行方」、特に構造調整政策の社会的・政治的影響が選ばれた。

具体的には、教育、都市サービスなどの社会政策が構造調整の中でどのように変化しているか、経済自由化のコストが階層間でどのように分配されているか、等の議論のほかに、構造調整・経済自由化を単なる経済政策の転換としてではなく、社会のあり方、あるいは社会と政府の関係の変化として捉える議論が興味深かった。

すなわち、従来ラテンアメリカの多くの国では、「政府が社会の面倒をみてきた」が、その役割を政府がマーケットに委譲することで、社会的まとまり (social cohesion) を弱める結果となり、それが昨年来域内で見られる政治不安の一因となっているという議論である。このように興味深い議論も多かったが、一つ難を言えば、全体的に議論がノーマティブ (「……とは……である、……べきである」) に流れたきらいがあり、各国で現実に起きている諸現象の比較分析がなされれば、さらに実りの多い大会となったであろうと思われる。

ALASの大会は毎年域内諸国を回りながら開催されているが、次回の第20回大会はアルゼンチンでの開催が決まっている。

(坂口)

○ワシントンDCへ出かける人のために

ワシントンでリサーチを実施しようと考えている方々に、強い味方となる手引書が出現した。*Scholars' Guide to Washington, D. C.* シリーズの1冊である。400ページを超える大冊の中身は14のセクションに分かれ、公私を問わず図書館、文書館、博物館、大学、データバンク、市民団体、大使館、学会、文化団体、メディアなど300以上の機関が網羅されている。さらに各機関につき、住所・電話等はもちろん利用方法、蔵書の特色、機関長 (部局長) の氏名等を知ることができる。研究者個人の関心分野によっては、これほど網羅的なものは必要ない場合もあるだろうが、純粋なワシントン案内として見るのも楽しいだろう。(飯島)

Michael Grow ed., *Scholars' Guide to Washington, D. C. : Latin American and Caribbean Studies*, Washington, D. C. Woodrow Wilson International Center for Scholars Latin American Program, 2nd. ed., 1992, xxv+427p. ISBN 0-943875-36-6

0-943875-37-4 (pb) \$19.95

Order from The Johns Hopkins

University Press, London & Baltimore

7. 近着会員業績

〔抜〕浅香幸枝「パンアメリカン日系協会の日系人リーダーが見たアメリカ大陸における日本のイメージの変遷——1940年—1992年——」(日本国際政治学会『国際政治・環太平洋国際関係史のイメージ』第102号、1993年2月)

〔抜〕同上「ペルー家族史——家族の伝統と近代化」(『ラテンアメリカ家族と社会』新評論、1992年)

〔抜〕真鍋周三「18世紀ペルーにおけるアレキパ蜂起の社会経済的背景」(東京外国語大学『コスミカ』XXII、1993年3月)

〔抜〕吉田栄人「ベリーズにおけるインド系移民の国民統合に関する一考察」(静岡大学人文学部文化人類学教室『アジア系ラテンアメリカ人の民族性と国民統合——民族集団間の協調と相克に関する研究——』1993年3月)

〔抜〕同上訳、デニス・バシエル著「ガイアナにおけるインド人下位カースト信仰および崇拜慣行」(同上)

〔抜〕柴田（長嶋）佳子「避けられればそれにこしたことはない」インド系と黒人系の間
の交婚について — ガイアナの事例を中心と
したスケッチ —」（同上）

〔抜〕江原裕美「ジャマイカの中等教育制度
とその改革計画」（平成2・3・4年度科学
研究費研究成果報告書『後期中等教育の史的
展開と政策課題に関する総合的比較研究』

1993年3月）

〔抜〕同上「コロンビアにおける新教育
の足跡 — ヒムナシオ・モデルノとアグステ
ィン・ニエト・カバイェーロ —」（東京大
学教育学部比較教育学研究室『知られざる新
教育 — 比較教育学的再考察 — 』1993年3
月）

〔抜〕同上「子どもたちと子どもの権利
条約」（『教育』6 №562 教育科学研究
会編、1993年6月）

〔籍〕田島久歳、山脇千賀子、新木秀和、高
木耕共著『日系人本邦就労者実態調査報告
書』（国際協力事業団、1993年4月）

〔抜〕片倉充造「『ピト・ベレスの自堕落な
人生』におけるピカレスク的性格の検証」
（京都外国語大学イスパニア語学科修士会
『REHK』創刊号、1993年3月）

〔抜〕同上「『私が愛したグリーンゴ＝オ
ールド・グリーンゴ』の覚書」（天理大学外国
語教育センター『外国語教育』第19号、1993
年3月）

〔籍〕グスタボ・アンドラーデ編『ラテンア
メリカの大学 — 歴史と現状 — 』（上智大
学イベロアメリカ研究所、ラテンアメリカ・
モノグラフシリーズⅧ8、1993年7月）

〔抜〕大串和雄「ラテンアメリカの左翼思想
の新展開 — チリ、ブラジル、ペルーでのイ
ンタビューから —」（アジア経済研究所
『アジア経済』第34巻第8号、1993年8月）

〔抜〕青木芳夫「アンデスの農事暦 — ペル
ー・プーノ県サンタ・ロサ・ヤナーケ共同体
—」（ラテンアメリカ資料センター『資料
ラテンアメリカ特集シリーズ 12』1993年7
月）

〔抜〕同上訳「エドムンド・オゴルマン著
『アメリカは発明された(2) — イメージとし
ての1492年』」（ラテンアメリカ資料センタ
ー『資料ラテンアメリカ』第23号、1993年8
月）

〔抜〕丸山浩明「文学や民俗音楽にみる干魃

の風景 — ブラジル北東部における地方主義
的文化活動の進展 —」（『金沢大学教育学
部紀要』第42号、1993年2月）

〔籍〕松下洋・乗浩子編『ラテンアメリカ政
治と社会』（新評論、1993年10月）

8. 事務局から

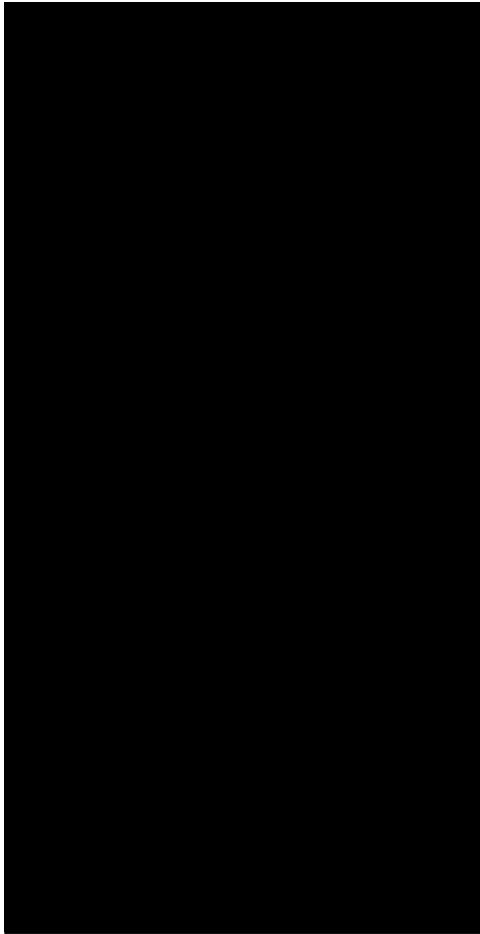
1) 寄贈図書

〔冊〕『イベロアメリカ研究』第XV巻第1号
（上智大学イベロアメリカ研究所、1993年8
月）

〔冊〕『拉丁美洲研究』第75、76期（中国社
会科学院拉丁美洲研究所、1992年12月、1993
年2月）

〔籍〕『中国社会科学』Vol. XIV, No. 1
（Editorial Board of SOCIAL SCI-
ENCES IN CHINA, Spring, 1993）

2) 新入会員（第63回理事会承認）



編集後記

昨年この欄で私が批判した日本の政治もこの夏ついに与野党が大逆転しました。それに伴って次々に出てくる政治献金などの事件を見ていると、永遠に続くかと思われた日本の政治も変わるだけの力を持っていたのかと見直したくなります。ソ連・東欧の大変動で始まった国際社会の転換の波は、とうとう日本にまでおよんできたようです。

次はどこか……と見渡すと、その先に見える国々の一つにキューバがあります。そこに私は来年1月(予定)より2年間駐在することになりました。キューバの今後予想される変化の様子と人々の生活ぶり、すぐそばにそびえる「北の巨人」との関係、等々をじっくり見てきたいと思っております。しばらく日本を留守にしますが、これからもよろしくお願いいいたします。(山岡加奈子)

* * * * *

今回の号から、従来の「書評」は「近著紹介」と改めることになりました(理事会報告を参照)。

会報に関するご意見や情報、記事は下記の各編集委員へお寄せください。

堀坂浩太郎(理事)、飯島みどり、
山岡加奈子、千葉 泉(在チリ)

No. 4 7

1993年11月30日発行

〒305 茨城県つくば市天王台1-1

筑波大学歴史人類学系山田陸男研究室内

日本ラテンアメリカ学会事務局

☎・Fax 0298-53-4034

郵便振替口座 宇都宮 8-10994